

平安京・羅城門とは

羅城門は、桓武天皇が都と定めた794年前後に、都の正面玄関に建設された門で、政治の中心大内裏から南に真っ直ぐに伸びる朱雀大路の南端に、添塀を含め幅約80メートル、高さ約24メートルに及ぶ丹塗り柱の堂々とした建造物であった。

8世紀当時の世界の都市、特にその参考とした唐の都「長安」は城壁を巡らせた（羅城）城塞都市であったにもかかわらず、この都は羅城を持たない都市であった。自由に出入りできる開かれた、平和な都市としてスタートしたのである。

都として正門は欠かせない建造物であり、外国使節を迎える儀式や国家鎮護の儀式を行った公的な建造物であり、人々の平和を祈る気持ちそのものを羅城と見做して、羅城門と名付けたのではないか、という想像も難くない。

建設後、二度の大風によって倒壊し、890年の二度目の倒壊後は再建されず、現在に至っており、倒壊後も、儀式や地方での戦の凱旋披露の場として、姿なきまま「羅城門」としての機能を果たした。

門としての視覚的、儀礼的な意味づけから人工的な境界と意識され、次第に強調される中で、異界と人の世の境界というイメージが現れ、今昔物語をはじめとする説話や室町時代の能楽師観世信光（～1516没）作の能の曲目「羅生門」、江戸時代の月岡芳年や河鍋晩斎などの浮世絵の題材となった。さらに、異界との境として、人の心のひだを際立たせる場としてのイメージは、大正時代の芥川龍之介の小説「羅生門」、昭和時代の黒澤明の映画「羅生門」、夢枕獏の小説「陰陽師」といった文学にも結実した。

このように、千若年を超える長き年月の間、歴史的記録の対象から、やがて文学や芸術、芸能の題材や発想の源とされてきており、忘れ去られることなく常にあたらしいイメージを私たちに提供し続けている。



[羅城門の読み方について]

読み方は、呉音で「らじょうもん」、漢音では「らせいもん」となります。「らいせい門」(『宇治大納言物語』『世継物語])や「らせい門」(『拾芥抄])とも呼ばれ、「らいしょう(頼庄)」「(『延喜式])や「らしょう」(『拾芥抄])は俗称とされていましたが、中世には観世信光(かんぜのふみつ)作の謡曲「羅生門」の影響からか「らしょうもん」が一般化したようです。

出典：京都市歴史資料館情報提供システム「フィールドミュージアム」解説シート「羅城門」

平安京・羅城門にかかる主な年表

- 794年 ○ 桓武天皇が京都を都と定め「平安京」と名付ける。
- 794年前後 ○ 羅城門が建設される。
※二重閣、入母屋造り、七間五戸。(朱雀門と同じと仮定。『延喜式』・『伴大納言絵詞』)
※推定、添塀を含め幅80m、高さ24m、奥行き21m。(「平安建都 1200年記念展覧会」京都府建築工業協同組合)
※都の正門として、昼間のみ扉が開かれ、夕刻太鼓の音とともに閉ざされ、早朝太鼓の音とともに開かれた。
- 816年8月 ○ 夜、大風により倒れる。(『日本後紀』)～嵯峨天皇のころ
- 834年ほか ○ 仁王經^{にんのうぎょう}を吼説した。
※天災や、戦乱社会秩序の安定を祈願する公的な儀式。
- 859年10月 ○ 夜、神祇官、羅城門前で祭事を修す。
- 939年 ○ 平将門新皇を称する。→羅城門楼上に兜跋毘沙門天像安置。(『東寶記』)
- 968年施行 ○ 神祇三臨時祭に、罪や穢れをはらう儀礼を羅城門で行う。(『延喜式』)
- 980年7月 ○ 午後、大風暴雨により顛倒。(『日本紀略』・『百鍊抄』)～円融天皇のころ
※このときより、東寺に兜跋毘沙門天像が迎えられ、安置。(『東寶記』)
- 1004年 ○ 丹波守高階業遠より再建の申し出、1年後辞退。(『御堂関白日記』)
- 1007年 ○ 藤原道長、羅城門を出て金峯山詣に出発。(『御堂関白日記』)
- 1023年 ○ 藤原道長、法成寺建立のため礎石を持ち出す。(『小右記』)
- 平安末期 ○ 玄象琵琶を取った鬼の住処、死人置き場として登場。(『今昔物語』)
- 室町時代 ○ 観世信光による謡曲「羅生門」。
- 江戸中期 ○ 鳥山石燕による浮世絵「今昔百鬼拾遺」。
- 幕末から明治 ○ 河鍋暁斎による浮世絵「羅生門ノ古図～東海道名所つゞき」。
- 1869年 ○ 明治天皇東京に行幸。
- 1915年 ○ 芥川龍之介による小説「羅生門」。
- 1950年 ○ 黒澤明による映画「羅生門」。
- 1986年 ○ 夢枕獏による小説「陰陽師」。
- 1987年 ○ 細野晴臣による楽曲「羅城門」。